

58 ケイトとキャサリン

「つけ乳首」ブームまで生んだマリア・シヤポワのおかげでテニス熱が再燃した勢いで「ウインブルドン」観にいきました。

キルステイン・ダンストとポール・ベタニーという、運動神経がいじょうぶかな？という感じもする二人がどんなテニスをするのかと内心こわごわでしたが、いやあ、CGさまざま。CGナシでゴルフの腕前を見せつけたキャサリン・ヘップバーンのすごさをあらためて見直しますね。

そのキャサリン・ヘップバーンを「アビエイター」で演じたケイト・ブランシェットですが、つい先日発表された英国版『エル』誌のスタイル・アワードで「ウーマン・オブ・ザ・イヤー」に選ばれてました。

数ヶ月前にどこかの雑誌が発表した類似の賞ではケイト・ウインスレットが選ばれていたし、スパー・モデルのケイト・モスははまだ威光おとろえず、ロック界のお嬢ケイト・ブッシュもグラビアを飾り、つい最近までオーランド・ブルームの長年の恋人だったケイト・ボズワースもタブロイドをにぎわせています。つまり、イギリスのセレブ界には、ケイト・似てないエヴァ・ガードナー・ベッキンセールを含めると、6人のケイトが君臨しているわけです。



「アビエイター」

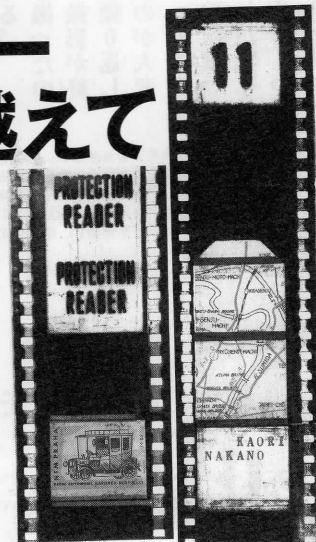
服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。



ドバー 越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織



カット=井上陽子

ご存知のように、ケイトはキャサリンの愛称ですが、あえて愛称にせずキャサリンを名乗っているイギリスゆかりのセレブはキャサリン・ゼタ・ジョーンズぐらい。

元祖「キャサリン」はすごい女だったんですよ。3世紀頃のキリスト教の聖女「アレクサンドリアのカタリナ」のことですが、時の皇帝が間違った神を崇拜していると主張した博識の女で、皇帝の怒りにふれて処刑されるんです。そのとき使われたのが「キャサリン・ホイール」というスパイクつきの車輪で、これがキャサリンを八つ裂きにしよとしたとたん、車輪がくだけちって見物人を襲い、とぼちちりを受けた何千人かが死んじゃった。今では輪転する火花をキャサリン・ホイールと呼んでますが。

知的で我を曲げず、周囲をいやおうなく巻き込んでしまう輪転火花のような激烈なイメージ（かなり強引）が「キャサリン」にあるとすれば、キャサリン・ヘップバーンはかなりその名を生きた感じがしますね。で、最近のケイトさんたち。最初から愛称ケイトを名乗るのは、親しみやすさ狙いか？ だからか、「ケイト」は「キャサリン」より小粒感ありますね。ケイト・ブランシェットもうまいのに（「コーヒー&シガレット」での一人二役は圧巻！）いまいちゼタ・ジョーンズのような大物感が足りないのは、「最初っから愛称」の名前のせいかも、とまで思えてきたりして。